

A・ファーガソンのみた歴史と人間の自然的性質

鈴木秀男

A・ファーガソンの「市民社會の歴史」としての一試案」(Adam Ferguson: An Essay on the History of Civil Society, Edinburgh, Dublin, 1767, 以下「史論」と略記)は變動の社會論であると云ふことが出来る。これは人間社會の發展と没落との契機を語るものであり、そこで取扱われた歴史は、この立論を實證するためのものであつたと考えられる。⁽¹⁾「史論」はその十四年前に現われた「J. Rousseau の「人間不平等起源論」(Discours sur l'inegalité entre les hommes, 1753, Dijon)と共に、富と個人主義に支配された「文明國民」の文化批判であり、このような社會の没落の因果理論であつたのだ。

註(1) W. A. Dunning: A History of Political Theories, N.Y. 1920. [p. 65]

I. Gumpowicz; Die soziologische Staatsidee, 2. Aufl. Innsbruck, 1902 [SS. 77-78]

(2) 町・イノトメ「歴史主義の成立」邦譯上巻・四四二頁。

フーガソンにとっては社會は前進か凋落か、繁榮か没落か、このいづれかの行程を辿らざるを得ない運命を擔つてゐる。ここでの問題は「自然狀態」から「市民狀態」への移行關係ではなくて、市民社會そのものがどのようにして發達し、變化して行くかという點にかかつてゐる。しかしスミスと同じようにフーガソンも、社會體がひたすらに sachlich な動因によつて變化するという觀方をとるものではない。客觀的な社會の變動も常に人間主體の精神的意欲に即してとらえられるにすぎない。フーガソンの場合にも社會の動因はもっぱら人間主體の性格 (Character) なり活動 (Vigour) に求められた。——この點について F・マイネッケはフーガソンにマキャヴェルリの Virtù, ランケの moralische Energie を見ている。「歴史主義の成立」邦譯、上卷、四四六頁——従つて彼の場合、人間主體の活動の高揚に應じて社會の繁榮が齎らされ、その意欲の停滯、萎縮によつて社會の没落が結果される。人間の活力の高低と社會の起伏とは因果關係にあるものとしてとらえられた。人間の、活動への専心という Felicity, 或いはその墮落 (corruption) もフーガソンにおいては單に道德論の問題ではなく、それぞれ國民的繁榮、社會の没落が相應する所の社會學的概念であつたのだ。⁽¹⁾

しかしこのようにして社會の變動が主體的な活動性によつて齎らされるものと考えられたと同時に、この人間主體の活動を規定するものとして、私有權の成立、利潤追求を契機とする經濟的發展への關心、ここから生れる貧富の差別によつて基礎づけられた政治的支配關係の確立の行程が分析せられていることはきわめて重要な點であると言わねばならない。言いかえるならば、フーガソンの史觀は——社會、國民に力を與え、従つてこの成員の福祉の一面を支える經濟的進歩は、人間の本質的性情に外ならず、それ故、成員の意欲によつて前進せしめられるものであつたに

A・フーガソンのみた歴史と人間の自然的性質

も拘らず、この進歩が私有權を契機とし、利潤追求の利益關心によつて促進せしめられるに至つて、富める者は奢侈により、貧しき者は、富への卑下によつて、却つて本質的な經濟進歩の意欲、國民としての活力を失うばかりでなく、富者の貧者に對する政治的支配權力の確立と貧者の奴隸化とを招來し、更にこの支配關係の擴大せられた獨裁制によつて經濟的進歩自身が壓殺され、社會の没落を結果する——という見解であつた。ファーガソンの分析はこの行程に向けられていたものと言えよう。⁽²⁾

註(1) M・ゴターニン「A・ファーガスンとその社會學說」——〔マルクス主義の旗の下に〕一九四六年、ロシア語版、第二輯、七九頁)

(2) Th. Buddeberg; Ferguson als Soziolog——(Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik. B. 123. 1925. Jena. [SS. 609—635] が、ファーガスンの中に、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの發展線のみ注目しているのは未だ不十分である。[SS. 634—635]

二

普通ファーガスンの社會觀が非合理主義的なものとして特徴づけられている場合、それは彼の、社會成立の原理に向けられた言葉である。しかしわれ／＼は、更に彼の、國家形成の原理をもそのように特徴づけともよいと思われる。何となれば後に述べるように、社會をなす原理は、社會によつて享ける利益への「考慮」ではなく「本能」であり、隣人への「共感」であり、人間の社會的愛情 (social affection) であるのと同じように、國家も最早や社會成員の契

約、「計畫」「意圖」によつて形づくられるものではなくて、階級によつて形成されるものと見られているからである。(1)が然し右の事情は單に、ファーガソンを非合理主義者と呼ぶために用いられるべきことではない。そうではなくて社會的愛情なり階級は、それを進歩の條件または没落の契機として見ることによつて初めて、「史論」を統一的に把握せしめる意味を明らかにするのである。

この見方からして、はじめに「史論」の基本命題を述べてよいとするならば、それは、(1)社會ないし國民の進歩と繁榮とを齎らすものは戦争國民における財の共有によつて保證された社會的愛情と、個人の能力の發達および能力そのものを重んずるといふ原理であり、これの政治的形式は民主制であるといふこと。(2)國民の没落は、産業社會への移行による經濟文化の進歩が私有權への關心を支配的ならしめ、その政治的表現としての君主制およびその擴大形態としての獨裁制と共に、社會的愛情と能力の進歩を壓殺する所に生ずるといふこと。(3)この没落をとどめるものは、階級闘争、特に法律に表現された、階級間の力の抗争關係であり、これが社會の恢復を保證するといふこと。——であると言えよう。

(1) H. Cunow: Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie, Berlin, 1923, 4 Aufl. [S. 114]・Neue Zeit, 38 Jg. I. B. Stuttgart, 1920, [S. 598]

ポターニン、前掲、七五頁。

(2) この點については今は立入らない。

三

ファーガスンによれば右にのべたように社會の繁榮を齎らすものは二つの自然的性質、社會的愛情ないし共感の原理と、能力進歩の原理とである。言いかえれば人間の社會的性情 (social disposition of man) [H. p. 27] と人間の進歩的性質 (man's progressive nature) [Pr. P. I. p. 190] とである。⁽¹⁾

まずファーガスンの社會的愛情 (隣人において社會全體にかかわる關心として國民的活力 national vigour. ないし公共的、政治的精神 public, political spirit とも言われている) について知ることにならう。前にもふれたようにファーガスンの契約説否定の根據はこの原理であつたのだ。契約説が社會契約と支配契約との二つの契機を含むものとするならば、ファーガスンの社會的愛情の吟味は、社會契約に代る所の社會形成の原理に導くと同時に、支配契約によらざる支配關係がどのようにして成立するかということにも關聯するのである。言うまでもなく、契約説の基礎にあるものが功利主義であるとするならば、ファーガスンの所論も亦、まずこの點に注がれる。「史論」の第二節「自己維持について」第六節「道德感情について」第七節「幸福について」等の諸節の中の多くの箇所所述べられているようにファーガスンの基礎的な觀方は「利益關心が人間行動の全動機をなすものではない」[H. p. 23] という命題である。かつてホッブス、ロックにおいて基本的であつた、自己維持ならびに快樂享受の原理はここでは一面的に妥當するにすぎない。ファーガスンには「快樂、苦痛が幸福や悲慘の要素ではなく」[H. p. 63]、生存への關心さえ人間行動の動因とはされておらなう。[H. pp. 47—48] 従つて人間の福祉は動物的欲求にふけることにあるのではな

かつた。[H. 5]むしろ財産ならびに利益への利己的關心は社會的愛情を冷却させ、政治的精神を失わしめるものであり、感覺的耽溺は人間の墮落、國民的活動の喪失を齎らし従つて國民の没落の主要な原因であつた。

しかしファーガスンは單に功利主義を否定することのみ強調するのではない。そうではなくてやはり人間の福祉 Felicity を齎らすものを見ていたのである。ただしそれは個人を満足せしめると同時に、國民的活力と社會の發展とを保證するようなものでなくてはならない。これが前にのべた人間の自然的性質の二つのもの、社會的愛情と進歩という原理だつたのである。社會的共感と公共的精神に生きること、目的をひたすらに追求する所に自己の能力を無限に進歩せしめること、このことは、個人にとつて最大の歡喜、淨福を齎らすと共に、社會にとつてはこの上ない確固たる基盤を意味するものであつた。

註① テクスターは、An Essay on the History of Civil Society, A new edition. Basil, 1789. (以下 [H.] と略記) およ
3' Principles of Moral and Political Sciences, Edinburgh 1792. (以下 [Pr.] と略記) を用いた。

四

啓蒙の功利主義、感覺主義は理論的にその個人主義と結び合つていた。従つてファーガスンの功利主義批判はまた個人主義的社會觀に對する批判でもあつた。上に言われた人間の社會的性情、社會的愛情という思考はその批判の根據であつたのだ。

47
ファーガスンにとつては最早や個人は社會に先立つものではない。そうではなくて彼の最後の見解は「人間

A・ファーガスンのみた歴史と人間の自然的性質

にあつては社會と個人とは同じ程度に古い。」といふことであつた。[H. p. 6] 従つて人間は集團の中に觀察されるべきものであり、[H. p. 6] 集團と同盟との中に生きるものとして描かれねばならない。[H. p. 4] モンテスキューの「人間は社會の中に生れ、社會の中に生きる。」という命題はまたファーガソンのものであつたのである。[H. p. 25]

しかしファーガソンのこの社會觀の基礎には言葉の使用と社會における人間の感情とについてのいかにも經驗主義的な、心理學的な考察があつた。ファーガソンにとつては「言葉の使用は手足を使用することと同じ程度に普遍的なもの」であり [H. p. 9] 従つて人間の自然的性質を理解する上に重大な意義をもつものであつた。彼はより詳細には論じていないけれども「感情を他人にわかち、他人の感情を知る」所の言葉の使用こそ [H. p. 1] まず人間の社會性を證明するものと考えたのである。そしてまた言葉と並んでこれを示すものは、人間の悲喜の感情は主として個人—社會の關係に基づくという事情であつた。すなわち人間の悲哀はその孤獨さから生じ、歡喜の感情は人間の集合から發するとのべられる。[H. p. 25] この社會的集合と感情との關係の考察は、ファーガソンの全見解にとつて重要である。すなわちまず彼は、正しい社會觀は、今言われた集合と歡喜、孤獨と悲哀という直接的體驗に根ざさなければならぬと考える。「人間の行動の契機をこのような直接的體驗に求めようとはせず、社會から退き冷靜な反省において思辨する所から、人間は利益關心のためにのみ行動するのだという見解が生ずるのである。」[H. p. 26] と言ふ時、われはファーガソンにおける直接的なものの評價の大きさを知らなければならない。⁽²⁾

しかし彼の場合特徴的なことは、ここに人間性の歴史的實證の途がつかずいていたのであつた。この「人間の社會的性情を最も單純な條件の例から觀察しよう。」[H. p. 27] といふ意圖がファーガソンの歴史敘述の根據であつたのであ

る。彼が未開社會、古代社會をとり上げてここに在る人間の精神的情況を語つてゐるのも「最も單純な條件の下にある人間は、自分が實際に感じもせぬものを故意によそおうというような術は學んでおらぬから。」[H. p. 27]であつた。この點から言えば、ファーガソンの歴史敘述は、古代社會を一つの *Gemeinschaft* として、特性的な歴史的個體として見ようという意圖に出たものであるというよりも、丁度自然科学的實驗が物質の本質を抽出するために、その條件の純粹化を求めるとに似ていふと言えよう。ファーガソンは近代の經濟的利益關心に擾されぬ人間性の本質が現われてゐる場所を歴史の中を探つたのだ。——この觀方は [H. p. 53] の註によつて支持されよう。「人間は利益に専心するといわれる。商業國民においてはたしかにそうだ。が然しこのことは何も人間が自然の性情からして社會的、交互的愛情にそむいてゐるということではない。利益關心が勝利を占めてゐる所でさえその反證はあるのだ。」——

次に中心的な問題であるが、ファーガソンにあつては、この社會的集合と人間の歡喜感情とが前にあげた社會的愛情の原理を指向してゐるのである。社會的集合における歡喜はこの原理の充足であり實現である。彼にとつては人間の社會的性情とは隣人への烈しい愛情 (*ardent affection*) [H. p. 27] であり友愛の熱情である。[H. p. 26] 即ち人間關係から生ずる所のこの愛情の炎が人間の胸に燃える [H. p. 26] ということがファーガソンの社會觀の基礎であつた。彼にとつてはこの感情は後にのべるように人間の社會的體驗から生れ得るものであり、この愛情の炎は利益、安全の考慮によつては最早や打消されぬもの [H. p. 26] であるのみでなく社會の危險、困難によつて却つて烈しく燃え上るものであつた。[H. pp. 27, 29] ⁽³⁾ 社會の共同防禦ですら利益の考慮によつてではなくこの愛情を互に發見し合うことによつてのみ可能となると彼はのべてゐる。

A・ファーガソンのみた歴史と人間の自然的性質

ここにあるのは最早や、社會を利益關心、安全への欲求から構成する見解ではなくて、社會をまさに community として、互に他への愛情によつてのみ成立するものと見る立場である。ファーガソンのこの立場はおそらく次の表現にきわめて明らかである。「愛とは心の關係をして自己を超えさせる感情であり、隣人への關係の感情である。この愛の歡びは關心の考慮によつて導かれてゐる人間には理解できぬ。」[H. p. 19] しかし更にファーガスンにおいてこの社會的愛情の普遍性を基礎づけているものは人間の自然的共感 (compassion) であつた。「人間は直接、自分にかかりのない事件にも感嘆、憐愍、怒りに心を動かされ、共感の涙を流し、血を沸き立たせるものだ。」[H. pp. 49-50] この社會的事件に對する感受さ (sensitivity) を交互の中に心を灯す炎、利益關心によつては左右されぬ炎を證明するものと考えられた。このようなファーガスンの非合理主義、超個人主義は「人間はこの本能によつて結合し社會においては親切と友愛の感情から行動するのだ。」と言う時 [H. p. 52] しかもこの他人への共感は「最早や説明しがたい事實」[H. p. 51] それは人間存在の根源的な様態であり、窮極的な感情に外ならない [H. p. 52] と言う時、最も明確に性格づけられてゐるのである。

前にものべたようにファーガスンにおいてはこの社會的愛情に生きることが人間の felicity の一つであることが、たとえば——「人間の福祉は動物的欲求にふけることにあるのではなく、仁愛の心に専心する所にある」と言ひ [H. p. 54] 愛、共感という源泉から人間の生活の主要な福祉が生ずる [H. p. 56] と言う所に——くり返しのべられてゐるのであるが、それと同時に重要なことは、社會的愛情が個人の淨福のみではなく、社會を支える力であり、國民的活力、公共的精神を基礎づけるという事情である。

まず前にも言われたように社會的集合によつて齟らされる歡喜は、社會的愛情の充足の感情である。しかしそれは同時に交互的に、個人の力を促進する感情でもある。「社會状態は人間の力を増大させる。」何故なら人間は社會においては自己の弱點を忘れ、自己の安全への利益關心を忘れ、生存を忘れ却つて自己の力と強さを發見するからである。孤獨の悲哀はまた無力感でもある。反對に社會状態は、隣人によつて支持されているという勇氣づけられた感情、自信を生む。こうして社會的愛情に支えられた成員は、幸福感情と共に力をも與えられるのだ——ファীগアスはこう考えた。[H. p. 28]

しかし更に彼はあの社會的愛情が直接、社會を強化する徳力を促進する事情をも考察しているのである。ファীগアスによれば、社會、公共という全體を支えているものは友愛、寛大、公共精神、忍耐、思慮、剛毅という徳力なのであるが、しかしこれらのものもあの烈しく、かわることなき愛情に直接關係するものであつた。[H. p. 58] 自己個人の利益、欲求への専心はこれら社會の力の原理に脊く。それはただ社會の弱化和没落とに導くものにすぎない。これに反して「愛と共感とは人間の心にある最も強力な動機であり、逆らい得ぬ烈しさを以て迫るものであつて、自己維持の心にもまして豊かな熱狂、満足、歡喜の源泉である」とされ [H. p. 55] この愛と共感とが人間をして財産と利益とを輕蔑せしめ、この輕蔑から勇氣と自由とが生じ、人類の幸福、自己の屬する社會の幸福への行動が決定されるのだと考えられているのである。[H. p. 55] 忿怒、復讐にも劣らぬ力で心を動かし、利益關心を犠牲にし、困難と危険とを通じて人を毅然たるものにする [H. p. 55] のはこの共感と愛とであり、これに基く廣大な感情、熱情が激しい活力、男らしい勇氣と結合して [H. p. 56] 社會の力を形成するのである。

A・ファীগアスのみた歴史と人間の自然的性質

このようにして共感、社會的愛情という非合理的衝動は、ファーガスンにおいて、單に社會形成の原理であつたのみでなく、またそれが社會の確固たる力をきざす原理でもあつたのだ。この故にこそ「幸福について」の節でも仁愛と勇氣とは結び合つたものとして考察されているのである。即ち、人間の幸福の第一の、そして主要な要素とは仁愛という自然の性情を行うことである。愛情、友愛、公共社會への熱中、廣い人類愛、これこそが悦樂と満足とを齎すものである。[H. p. 82]まことに人間の心は全體の福祉のために烈しい熱情で灼けるのであり、この熱情に従うことが自己を社會の成員として規定することであり、これが幸福なのである、と。[H. p. 83]所がこのような社會、公共への友愛、心の熱中の中に、社會、黨派の敵に對する恐怖が消え、勇氣が生ずる。勇氣とは人類の福祉に捧げられた心に生ずるものに外ならないのである。[H. p. 83]自己の利益關心への配慮は怯懦と卑劣とに導くもの。公共に捧げられた心、公共的精神、國民的活力はこの自己的配慮から解放されることによつて、積極的となり恐怖を忘れ、勇敢になるのだ——ファーガスンはこのように語つてゐる。[H. p. 84]

註(1) ファーガスンとモンテスキューとの關係については、上掲ダニング、ゲンプロヴァイツ、およびポターニン、七八頁。

(2) ファーガスンの心理學的方法については、上掲ブッデメルク [S. 623]

(3) ここにファーガスンが社會的愛情と戰爭國民とを結び合わせている理由がある。これは後にのべられる、産業社會への移行と社會的紐帶の弛緩との關係に對應する。

右のことが明らかになつたとすれば、次にわれ／＼は愛、共感、公共的精神という「社會の紐帯にして力なる、心の感情と力」[H. p. 311]がどのようにして失われるかを見ることにしよう。フーガスは、私有財産への關心がこれを亡ぼし社會を墮落させると考へる。それならば社會的愛情を保證し、私有財産を含まなかつた社會は何か。フーガスによればそれは、未開の戰爭國民である。この社會では土地は國民の共有物であり、收穫は公共の倉庫におさめられた。[H. p. 126]従つてここでは所有權には注意は拂われず[H. p. 124]、財産による社會的差別は存在しなかつた。[H. p. 128]勿論この社會にも統治の必要はある。然し戰爭國民という性格からして支配、服従は年令、能力、性質の差による機能の分化にすぎなかつたのだ。[H. p. 128]従つて支配者は階級として固定化することはない。未開社會にはたとえ統治者はあつても統治者の黨派が、永久に支配しようという煩わしいことを考へず、被統治者の黨派も永久の服従という苦痛をうけなかつた理由はこの事情による[H. p. 128]であつて、フーガスも所有關係からしてこの状態には服従、支配の端初は殆ど存在しなかつたとのべている。[H. p. 124, 142]私有への關心が存在しないとすれば、上にふれたように能力による社會的評價が完全に妥當し、また性による服従さえ愛情に妨げられ、奴隸制というものは現われぬ。[H. p. 127]むしろこの社會における所有物、關心の對象といへばそれは社會への愛情、公共の愛、友愛、勇氣に外ならなかつたのである。[H. p. 144]⁽¹⁾

われ／＼がここで注意すべきことは、フーガスが戰爭國民—所有形態—統治形態の規定關係を把握していたといふことである。彼は言つてゐる。——このような社會の統治形態は、平等を愛し、隣人の權威を尊重し、利益を考へず公共のために働くという民主制 [H. p. 101]、社會的差別の主たる原理は個人の質であり、階級は能力、功績に

A・フーガスのみた歴史と人間の自然的性質

よつてきまるにすぎない民主制である。[H. p. 102]この民主制を成立せしめているものは、上に見た私有権への無關心とそれを基礎づける所有形態であり、この所有形態自身、戦争性（これは原始的な生産力形式だ）によつて根拠づけられているのである。

このことからすれば、愛と共感という原理が失われて行く過程はまた、生産力の進歩（ファーガソンの未開と文明とを分ける一つの Merkmal はこれだ）、それに關聯する私有財産状態、そしてそれに規定される統治形態を含んで吟味される必要がある。このことは彼が歴史を人間の進歩の行程として即ち人間が自らを強め安全なものにするための諸々の技術 (arts) の見取圖と見た [H. p. 351] と共にまた政治形態の民主（共和）制から一君主制—獨裁制への變化ないし循環の過程として見た [H. p. 110] 所に現われている。ファーガソンによつては經濟技術 (commercial art) の進歩の行程としての歴史も、右のような統治形態の變化の過程としてみれば墮落の行程に化するという事情がある。「共和制から君主制への變化すなわち平等の原理から出生、資格、財産に基づく服従感への變化は人間にとつては墮落である。」[H. p. 379] 何故なら君主制は大きな財産所有と階級差別的のしるしである。ここでは社會のためにする能力ではなく階級の分裂、財産の隔りが社會的優越の基礎となる。貧富ということのみで一方は尊敬され、他方は卑下される。一方は誇り、他方は沮喪する。一方は傲岸、尊大となり他方は隷従、物慾的となる [H. pp. 378—379] 愛と共感、公共的精神の反對しか生じえないからである。そればかりではない。この關係はまた支配服従關係の基礎でもある。ファーガソンは言う。「この土地を所有し、これを子孫に残そう」と最初に言つた人間は、かくすることによつておのれが民法と政治制度との基礎をおくことになつたのに氣が付きはしなかつた。」と。[H. p. 106] クノ

がファーガスンの中に支配機構としての國家を見、ポターニンが國家の階級的性格を見ているのはこの事情による。ファーガスンが政治制度 (political establishment) の下に考えたのは君主 (貴族) 制とその擴大形態としての獨裁制とであつた。彼は國民的維持の目的につかえず却つて自らの經濟的利益のために支配階級として固定した黨派 (faction) とそれによつてつくり出された被支配階級との關係を政治制度と呼んだのであり、彼の國家成立の契約説否定の根據はここにあつた。このことは彼が「社會の形態は、いづこから吹くかも知れず、また自らの好む所に通う風にも似て、その由來する起源は遠くかつ定かではない。」[H. p. 186]と言ひ、更に社會の結合ないし服従關係は協議によつて成立した統治計畫または法の體系を以て行われたものではないと述ぶ [H. p. 185] “No constitution is formed by concert, no government is copied from a plan.” [H. p. 187] と言ひ時最も明らかである。

だとすればわれ／＼の問題は、民主制から君主制の轉換をファーガスンがどこに見たかという點に集注される。彼はここに二つの契機を見たと見つてよい。その第一は、民主制を可能ならしめていた戰爭國民内の軍事的統治關係が私有財産と結合したことであり、その第二は、これと同時に戰爭國民が産業社會 (商業國民 commercial nation) に發展して行くということである。第一の點について。「統治關係のモデルは軍事的服従關係から取られた。」[H. p. 200]しかしそればかりではない。人民の中には上官のために勞働し、土地耕作を行わねばならぬ者があつた。將校階級はこの一時的保有權を終身のそれに擴大し、更に子孫に及ぶ承認に轉化することによつて私有權を確定して行つた。ファーガスンはこの所に、貴族階級の發生、國家内における永久的階級の確定、自己の領地における專制君主の成立を見たのである。[H. p. 200] 君主制は富の誇示による權威であり、財所有による階級づけである。[H. p. 103] 從

つてここに財の所有關係の確定と共に支配權力は永久的階級として固定するのだ。[H. p. 107]次に第二の點について。戰爭狀態の持續する限り、人間の追求するものは自然的欲求を充足せしめる對象にすぎない。私有財産は存在してもこの限界にとどまる。従つて財所有による階級の優劣は認められず、これに基く支配關係は成立し得なかつたわけである。[H. p. 144]所が、平和の時代が來り、財交換の可能性が生ずると、「狩獵者や戰士は次第に職人や商人に轉じて行く。」のである。[H. pp. 273—274]フーガスはここに、人間に本質的な技術改良が急速に進歩し始めるものと考へるのである。

彼にとつては人間の進歩は技術の進歩である。何故なら「技術は人間にとつて自然的なもの」だからである。[H. pp. 10, 255]しかしその技術はあくまで人間の自然的性質を改良する技術であるべきであつた。[H. p. 313]フーガスが歴史を *savage—barbarian—civilized (polished)* と分けた時、たしかに彼は近代社會の經濟技術上の進歩の意義を大きく評價してはいる。が然し他方に近代の人間は「文明」「洗練」という言葉によつて恥ずべきものをも却つて尊んでゐる、と非難することを忘れてはゐない。[H. p. 313]洗練された文明という場合、「われわれの評價は國民的性質、人間の福祉に關係のない事情に基つてゐる。」と。[H. p. 310—311]その理由は何か。人間は自己の自然的性質を改良する技術の代りに、富を増大する技術をおいてゐるからなのだ。[H. p. 313]經濟技術は財への利益關心のために用いられる結果、財の不平等をいぢりしく増大し、階級差を深める。[H. pp. 328, 375]また技術の改良、經濟の前進を促進する分業も、結果としては社會の紐帶を破り公共の意識を減退せしめるばかりでなく [H. p. 330]新しく階級分裂を生ぜしめる契機となる。[H. p. 279]このようにして悪用された技術進歩は大財産を生み、大財産

はそれにつきものの耽溺、亂行、放蕩、虚榮、傲慢を生ぜしめ、墮落の源泉としての、そして國民的退化と破滅の前兆としての奢侈を結果するのだ。[H. pp. 369—370] それはまた支配者の強欲を煽ることによつてこれを獨裁制化する。このような理由からファーガスンは言っている、——技術の發見、文明の繁榮というものは徳性によつて得られたにせよ、墮落、惡徳原因になることが少なからぬ [H. p. 312—313]。また、いわゆる完成した文明 (civility) においても、國民が傾き易く破滅的墮落というものはある [H. p. 317] ——と。

われ／＼はこの Hasbach 等及び Lehmann が指摘してゐる點に立入ることは他の機會にゆすることとし、その基礎として、はじめにあげたファーガスンの原理、愛と共感とに並ぶ自然的性情としての進歩の思想を知ることにした。

註(一) 種々の點について「社論」を Lewis H. Morgan: Ancient Society, or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery, through Barbarism, to Civilization, London 1877 などと Fr. Engels: Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates, 1884. に關聯せしめて研究することゝ重要である。

② W. Hasbach: Untersuchungen über Adam Smith, Leipzig, 1891 [S. 319]

W. C. Lehmann: Adam Ferguson and the Beginning of Modern Sociology, N. Y. 1930 [p. 173]

フ・マイネッケ 上掲四四五—六頁。

六

57
前にも言つたようにファーガスンは技術の人間に對する意味を重んじてゐる。彼によれば人間の特性は「自ら設備

A・ファーガスンのみた歴史と人間の自然的性質

をととのえ、自己の福祉をつくり上げ、自己の才能を改良する運命を擔つた存在である。」という所にある。[Pr. p. 52] 自己の動物的性質の、しかし必要と缺點とを補うために、その目的について合理的な觀念をもち自己の觀察と判斷とに基いて手段を選択すること [Pr. p. 54] ここにファーガスンは、人間の技術的性質を見た。尤も彼のいう技術の中には政治技術を初め文藝、科學までが含まれるのであるが、最も基本的なものは人間の物質的生産にかかわる經濟技術 (commercial art) であつた。[Pr. pp. 58, 59, 174] しかし問題は更にファーガスンがこの技術をたえざる進歩の過程で見ているという點にある。「經濟技術は動物的生活の必要から生ずるものではあるが、持續し増大する消費を充し、増加擴張した必要に應ずるために自ら持續し、増加し、擴大する。」 [Pr. p. 242] 技術は生活様式をその時々必要に一致せしめるために [Pr. p. 57] たえず變化し進歩せざるを得ない。だとすれば技術の進歩の原理は、たえざる追求 (pursuit) であることが明らかだ。技術の改良を促進するものは、現在よりもヨリ良いものを欲する心であり、常に新しい對象によつてかき立てられる追求心であり、熱情のばねであるとファーガスンはのべている。 [Pr. p. 56] 現在もつてゐるものより更に良いものを欲求する ambition [Pr. p. 207]、現在あるよりもヨリ高いものをめやす passion [Pr. p. 235, 239] など「進歩、前進の原理」であつたのだ。この原理によつて初めて人間は動物的性質から生ずる欲求、必要、不便からそれを充す對象へ向つて積極的追求を行いうるのである。ファーガスンは課題にはたつきかける active being [H. p. 12] をこそ人間の自然的性質だと見ている。ここに人間の主體的な作用がその技術性と進歩性においてなお人間の自然としてとらえられている。しかし主體的活動はたえず現在をこえて進む意欲、熱情によつて發し、その繼續的努力としてはたらくと同時に、この努力、追求が技術の改良 (improvement) として

現われるならば人間の本質は却つて、たえざる技術の前進、進歩の行程として描かれるに外ならない。「人間の發明の最も新しい努力にしても、それは初期の原始状態に行われた工夫の連続にすぎない。」[H. p. 13]のよある。

人間の自然を最早や固定的、靜止的な姿においてではなく、過程的に流動的に觀じたファーガソンの意識は特徴的である。「人間の姿はたとえ流れる水であり動かぬ溜り水ではない。」[H. p. 11]しかしこの過程と流動とを生み出すものは人間の主體的活動、技術進歩への意欲と熱情であつた。「人間は休息のためにつくられたのではない。」[H. p. 318]何故なら「人間は常に問題を改良しつづけ、永久に改良にいそがしい。」のだから。[H. p. 10]勿論彼はこの活動に知性の能力を結びつけてはいる。「知性者の生命と活動とは、現在の状態は改良さるべきだという意識、觀念およびこれに基いてヨリよいものを得ようという努力の中にある。」[Pr. p. 200]知性とは意欲に仕える能力、手段の觀察および選擇の能力に外ならぬ。従つて知性のこの能力によつて人間はその獨自性を得る。しかしファーガスンは知性を「本能」に對立した理性とは考えない。本能が自然のつくり手によつて與えられた性向ならば、理性も亦同じ性向である。強いて兩者を分ければ、本能は目的を知るに先立つて手段を用うる能力を意味し、知性は、目的を得る手段の觀察、選擇能力、人間を前進の目的に導く能力の力ではあるが、それも亦一つの disposition, propensity に外ならぬとするのである。

ファーガスンは、この進歩性を無限の上昇過程において考えている。進歩とは前の時期になかつたものが後の時期に得られたということ [Pr. p. 184]だとすれば、この進歩の原理が積極的追求めの熱情になわれている以上、人間は無限の前進をなしうる存在ないし、無限に自己の情況を改しようとする可轉的存在 [Pr. p. 59]と考えられる。

しかしファーガスンはこの無限の過程を、動物的性質から生ずる欲求充足の完全状態へ無限に接近することであると(1)してとらえた。人間は無限的完成に連続的に進歩して行くものに外なげぬ。[Pr. p. 184—185] 彼がこの進歩の過程を、直線にたえず近ずいて行く曲線にも似て完成することはないと言っていることは [Pr. p. 185] 實は却つて彼の進歩の思想を一層鮮かに語るにすぎない。すなわち、進歩の各期はそれぞれの缺點、不完全さをもち、またたえずそれを後に残して行く。[Pr. p. 185] 所が「缺點のある状態からヨリ良くヨリ高い状態の獲得に進むこと、これは進歩する存在の價値を貶すことではなくて、却つて、この過程こそ進歩する存在の特にすぐれた點であるのだ。」[Pr. p. 199] のようにして「自己が苦しんでいる缺點を自己の意欲におかれた限界としてではなく、自己の努力のための一つの機會、一つの拍車と考えることが重要だ。」[Pr. p. 200] という時、彼の進歩性の原理は、最も明らかになつてくる。

しかしファーガスンにおいて重要なことは、この人間の進歩が單に個人における上昇としてではなく各世代における前進としてとらえられている點である。進歩とはものの一つの状態から他の状態への移行 (transition) であり、これは前進の意欲になわれた人間の、知力を以てする連続的努力の痕跡に外ならない。しかしファーガスンはこの行程が個體の中のみ生ずるものではなく、人類の進歩はまた一世代 (generation) から他世代への進歩であることを知つていた。個體發生的考察に對し類發生的考察が強くあらわれているのである。

しかもこの過程は、各世代がその前世代によつて既に採用された技術、設備状態の上に立ち、これを次の新しい發明と改良との基礎として役立てるといふ繼續的行程としてとらえられている。[Pr. p. 194] 即ち一世代の發明は次の

世代に新しい情況を用意し、後につづく世代は前の世代の活動の結果によつてたえず新しい情況に入るのである。[Pr. p. 58] ここで明らかにすることは前進の「段階」は、また「蓄積」の過程であるということである。人類のたえざる現在の状態はその世代的前進によつて形成されたもの、過程の蓄積物に外ならぬ。ファーガスンは言っている。「ものの自然の状態とはその運動全體の蓄積視點から考察されるべきだ。」と。[Pr. p. 102] このように後續段階に對する先行段階の蓄積意義を強調することによつてファーガスンにおいては歴史的過程の契機として、前に言つたような主體性、進歩性、段階性と共に歴史的規定性が思われていたことがわかる。先行段階は新しい段階のために條件、基盤、情況を形成し提供するという意義をになうものである。ファーガスンが「現在は過去ならびに未來に媒介的に關係する。」[Pr. p. 195]と言つていることもこの關係を示しているものであろう。しかし過去は、單に現在を限定するものとしてではなくあくまで進歩的な蓄積と見られ従つて段階は、常に過去の進歩の凝結であると共に同時に未來に對して開放的役割を果す。歴史的規定性は限定性と共に進歩性を含む。むしろ積極的追求はこの限定性の中に自己の前提を見出すものである。限定は前進を阻害するのではない。彼が更に「かつて在り、また現在ある世代は、來るべき世代に道をゆずり、かつてありしものすぎ行く間に、かつてあらざりしものが生れてくる。」[Pr. pp. 174-175]と言つているとすれば、彼にはまた歴史的相對性の思考すらあつたと言えよう。彼の進歩の思想はこのような特徴をおびたものであつた。

そして前にも言つたようにこの進歩そのものが人間の自然状態であつたのだ。ファーガスンは言つている。「獲得された利益の上に立つて常に改良しつづけること、かく前進することが人間にとつての自然状態」なのだ。[Pr. p.

A・ファーガスンのみち歴史と人間の自然的性質

190] 生物の自然状態とは、胚から青年期、壯年期というように、生命があらゆる變化をなしつつ通過する段階の全てを含むように [Pr. p. 192] 人間の自然状態は「世代から他世代への連続的繼續、種々の年代が年々附加するものに結びついた進歩的獲得物にある。[Pr. p. 194] 即ち自然状態は人間が問題をたえず改良しつづけ、至る所で發明を行ふその所に [H. p. 10] また「問題にはたつきかける積極的性質の中に」[H. p. 12] あるに外ならない。ファーガスンによれば人間が前進し始めると共に自然状態を棄てこれから離れて行くといふことは正しくなく [H. p. 13]。そうではなく未開状態から文明状態への發展そのものが人間の自然状態なのだ。「野蠻状態も文明状態も旅ゆくものが通過せねばならぬ單なる段階にすぎない。」[H. p. 12] 彼にとつては「進歩するものにはその進歩そのものが自然の状態と考えられる」のであつた。[Pr. p. 197]

註(1) ファーガスンにおける完成への進歩性を取扱つたものとしては U. Kaneko: *Moralphilosophie* Adam Ferguson's [Diss] Lucka 1903.

最後に、われわれはこの進歩の原理を、前にふれた戦争國民から産業社會への移行に關聯させて見ることにしよう。既に言われたように戦争は、社會成員の公共的事件への熱中、社會への没我的献身、愛情、勇氣、友愛をかき立てるものではあつたが、しかしファーガスンは、經濟的進歩の立場から戦争はやはり一つの疾病であると言ふ。[H. p. 37] 戦争國民から産業社會への進展は今言われたことからすればまさしく進歩であつたのみでなく、いわば必然的な進化であつたと言えよう。「商業(經濟)時代は、人民進歩の初期の生活條件のはるか上に、人間を上げた。」[Pr. p. 247] 經濟の目的はそれらの狀況に在る人々の條件を引上げること、その必要をその時々の供給によつて充すこ

とであつた。[Pr. p. 247] としてその豊饒化は、商品を餘剰の場所から缺乏の場所へ流通せしめることによつて行われるのであるが、ファーガスンには、明らかに商品交換の概念「相互餘剰部分の處分」[Pr. p. 245]の思考があり、この餘剰商品の量が國民の富であつて、それが社會的設備、財の貯藏量を増大させるとのべられてゐる。[Pr. p. 249]

この點に聯關して注意すべきことは、商品生産力の改良ということが考察されているという事情である。ファーガスンが、經濟活動は多様な才能を要求しまた精神能力を大いに發達せしめること、すぐれた才能を用いることによつて發明が生み出され、業務の管理が知識の擴大を要求すること [Pr. p. 250—251] 或いはまた土地生産物は、労働者によつて新しい形態を與えられること、しかも労働者の道具としては諸々の動力、器械が必要とされること [Pr. p. 245] 更に人間の經濟活動は道具を與えられるに従ひ、かつ仕事を個人の性質と才能とに適するように社會の中で、分化させるに従つていちじるしく促進されること [H. p. 273, Pr. pp. 244, 251] を語つてゐることからすれば、ファーガスンに生産力進歩の思考が支配してゐたことが明らかになる。特に彼が商品生産と分業との關係を一節をもうけて論じてゐることは、注目すべきである。[History; Part-IV, Section-I. pp. 273—278; Principles; I., 246] われわれはここにファーガスンが、分業による労働生産力の高揚のみでなく、分業による労働の社會化をも思つてゐたことをつけ加えよう。「このようにして、人間の才能は相互協同に役立ち、人はみな他人の福祉に寄與するという意味と力を得るのだ。」[Pr. p. 247]

しかし、ファーガスンは、このように社會の富を増大させ人間の經濟的進歩を齎らす所の契機をやはり個人の利益 A・ファーガスンのみた歴史と人間の自然的性質

追求の中にみた。進歩の一般的原理「現在よりヨリ良いものを得ようという欲求」[Pr. p. 248]「人間は獲得した物を更に完成しようとする。彼はなしたげたものに満足することはなく」[Pr. p. 244]「という自然的性向が私的所有に結びついて進歩の動因となる。經濟技術の進歩の目標は富であり」[Pr. p. 254]「利潤であり」[Pr. p. 250]「富所有の優位を得ようとする欲求を動機とするものに外ならないのである」[Pr. p. 244]

註① K. Marx: Das Elend, der Philosophie, Stuttgart und Berlin, 1921 [S. 113]

——: Das Kapital, B. I, Hamburg, 1867. [S. 338]

A. Oncken は「フーガソンが分業論についてハックスの師であるという説に對し、異説をとなえ、その「Adam Smith und Adam Ferguson」I, II. — Zeitschrift für Socialwissenschaft, XII Jg. Leipzig, 1909. [S. 129 f. 202 f.]

かつて、共感という自然的性向のままに行爲することが個人の felicity を齎らすのみでなく、また社會の力を生ぜしめるものと言われたのと同じく、缺點から完成への passage ないし移行は、進歩的自然性をもてるものの felicity であるのみでなく [Pr. p. 200]、また人間の歴史の前進を結果するものである。フーガソンは言っている。「壁をなす石の正しい秩序とは、それが、目的の場所に正しく固定されているということである。石が動けば建物は崩れる。しかし社會をなす人間の正しい秩序とは人間が、正しく活動 (act) し得る場所におかれていたということだ。……社會は生ける活動的な (living and active) 成員から成るのである。……不動と靜穩との秩序は……奴隸のそれであつて自由人の秩序ではなく」[H. pp. 406—407. 註]「まことに人間の幸福は積極的努力の中に在るのであつて、これらの努力はそれ自身で最上の福祉なのであり」[Pr. p. 250]「目標はそれを得ようとする追求の努力ほどには價値は

なるのである。[Pr. p. 254] とも拘らずこの追求、前進はその契機、目標として富への關心をもたざるを得ず、この關心は上に言われた財の不平等、階級差別、支配と服従を齎らし、生き／＼とした Thätigkeit を破るに至る。

現在、資本主義社會の歴史的使命として呼ばれている矛盾的關係を、フーガマンは産業革命の前夜において既に豫知していた。ズルンマンが階級闘争論の端初をフーガマンに見つゝるのも故なきことなるのである。[W.

Sulzbach: Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung. Karlsruhe. B. 1911, S. 51 f.]

フーガマンのこの文獻は、右にも述べた外に、(上掲) Lehmann pp. 261—262) 並び

H. Huth: Soziale und individualistische Auffassung im 18. Jahrhundert vornehmlich bei Adam Smith und Adam Ferguson, Ein Beitrag 3 ur Geschichte der Soziologie.——[Schnollers' Staats- und sozialwissenschaftliche Forschungen, Heft, 125. Leipzig, 1907.]

H. Bonet: Adam Ferguson et ses idées politiques et sociales.——[Journal des Economistes, 1898, No. 3, Paris, pp. 321—334]

Encyclopedia of Social Science, N. Y. 1937, Vol. 6, "A. Ferguson" by W. C. Lehmann.
またフーガマンの著述は、その著者の Simon Nicolas Henri Lingnet: Théorie des lois civiles ou principes fondamentaux de la société, Londres, 1767.

John Millar: Observation concerning the distinction of Ranks in Society. (The Origin of the Distinction of Ranks) Edinburgh, 1771.

フーガマンの「史論」に關聯するテーマを取扱った當時の諸著作については、上掲 Huth. XIV—XV. Lehmann. pp. A. フーガマンのみを歴史と人間の自然的性質

259—260.

ハーガレン (1723—1816) の掛辭。

1767. An Essay on the History of Civil Society, Edinburgh, Dublin.

邦訳の註釋——Versuch über die Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft, von Chr. Garve, Leipzig 1768.

——Abhandlung über die Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft; von V. Dorn, 1904.

Jena.——[Sammlung Sozialwissenschaftlicher Meister, B. II]

邦訳の註釋——Essai sur l'histoire de la société civile, par M. Bergier, Paris 1783.

邦訳の註釋——イヴォマン・チャロンスキー ヤンド・ヴェルステンブルグ 1817—1818.

邦訳「市民社會史」大道安次郎 二卷 東京 1948.

1772. Institutes of Moral Philosophy, Edinburgh.

邦訳の註釋——Grundsätze der Moralphilosophie; von Chr. Garve, Leipzig, 1772.

邦訳の註釋——Institutions de philosophie morale. (sans nom de traducteur) Genève, 1775.

邦訳の註釋——ヤチンズヴォット 1804.

1783. The History of the Progress and Termination of the Roman Republic. 3 vols, London.

邦訳の註釋——Leipzig, 1784—86,

1792. Principles of Moral and Political Sciences, 2 vols, Edinburgh. (Edinburg 大學叢書)